

Title	生死減少逆行ノ法則 - 人口學の征服
Author(s)	高田, 保馬
Citation	經濟論叢 (1916), 2(6): 1009-1034
Issue Date	1916-06
URL	http://dx.doi.org/10.14989/127034
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷二第

論說

●戰後ノ關稅團體ノ計畫
●生死減少逆行ノ法則

研究

●植民政策上ノ根本問題
●本多利明ノ經濟說(三完)

雜錄

●不換紙幣流通ノ根據ニ就テ
●在外正貨ノ處分ニ就テ
●數トリ切手貼用法
●全米貨幣統一案
●獨逸^{ニ於ケル}工場衛生問題ノ研究
●經濟雜誌(三)
●再ビ本多利明ノ著書ニ就テ
●歐洲戰爭ノ經濟的說明
●戰時戰後ノ佛國物價
●香港政廳卜對獨貿易

法學博士 戸田 海市

講 師 高田 保馬

法學博士 神戶 正雄

講 師 本庄榮治郎

法學博士 戸田 海市

法學博士 神戶 正雄

教 授 財部 靜治

助教授 河田 嗣郎

助教授 山本美越乃

法學博士 田島 錦治

講 師 本庄榮治郎

法學博士 河上 肇

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 佐藤丑次郎

生死減少逆行ノ法則

—人口學の征服—

講師 高田 保馬

一、緒言、一二死亡率均等ノ法則、一三、生死平行法則ノ歸結如何、一四、出生率増差ノ法則、一五、生死減少逆行ノ理由、一六、人口學の征服、

一、緒言

出生率ノ減少ハ現代文明諸國ノ共通病弊ナルト共ニ死亡率ノ減少モ亦近代ニ於ケル一般的現象ナリ。然ルニ、二者減少ノ速度ハ決シテ Bertillon 等ノ主張スルガ如ク相同ジキモノニ非ズ。吾人ノ信ズル所ヲ以テスレバ、二者ノ減少ハ生死平行法則ノ示スガ如ク相平行スルモノニ非ズシテ、寧ロ之ト正反對ニ相逆行セリ。死亡率ノ減少ハ死亡率ノ大ナル所ニ大ニシテ、死亡率ノ小ナル所ニ小ナリ。然ルニ、出生率ノ減少ハ出生率ノ大ナル所ニ大ナラズ、マタ必ズシモ、出生率ノ小ナル所ニ小ナラズ。寧ロ、出生率ノ小ナル所ニ大ニシテ其大ナル所ニ小ナル傾向アリ。之ヲ假ニ稱シテ生死減少逆行ノ法則ト云フ。此法則ハ現代文明ノ進展ニ伴ヒテ顯著ナル作用ヲ現ハス可キ運命ヲ有

ス。其行ハルル事若シ久シキニ及バンカ、文明ノ強國ハ未開ノ弱國ノ爲ニ、都市ハ田舎ノ爲ニ、貴族ト富豪トハ貧者ノ爲ニ征服セラレ、弱者ノ勝利ハ自ラニシテ實現セラル可シ。敢テココニ征服ト云フ、コハ其血脉ノ漸次其跡ヲ絶チテ、其蓄積シ支持シ來リシ文化的產物ノ盡ク他人ノ子孫ニヨリテ侵奪セラルル事ヲ意味スルナリ。自ラ殘存シテ他ノ死滅ヲ見他ノ有スルモノヲ獲得ストセバ、之ヲ征服ト云フモ決シテ不可ナル事ナカラン。而シテ此征服ガ何等流血ノ戰爭ニ依ラズ、政治的爭鬭ニヨラズ、經濟的競爭ニ依ラズ、タダ平和ニシテ自然ナル出生死亡ノ人口學的過程ニヨリテ生ジ來ルガ故ニ、人口學的征服ト名クルノミ。新シキ時代ノ民本の傾向ハ夙ニ政治的經濟的方面ニ於ケル弱者ノ勝利ヲ豫約セルニ似タリ。然レドモ吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ、ヨシ此等ノ方面ニ於ケル反抗的運動ノ盡ク失敗ニ歸スル事アルモ、弱者ノ勝利ハ必ズ他ノ方面ニ於テ遂ゲラル可シ。何等階級爭鬭の人種爭鬭の意義ヲ有セス、タダ自然的ニシテ無意識的ナル人口學的過程ハ、徐々ニ而モ確實ニ、弱者ノ勝利ヲ實現セシメントシテ強者ノ殺戮ヲ行ヒツツアルナリ。

二、死亡率均等ノ法則

西歐ノ諸國ニ於ケル死亡率減少ノ趨勢ヲ見ルニ、死亡率ノ大サハ其國ヲ異ニシ、階級ヲ異ニシ、人口ノ密度ヲ異ニスルニ從ヒテ、常ニ區區ナル姿ヲ呈セルニ拘ハラズ、減少ニヨリテ漸次二均一ニ傾カントスル勢アリ。換言スレバ大ナル死亡率ハ其減少ノ程度亦大ニシテ、小ナル死亡率ハ其減少ノ程度亦小ナリ。而シテ其中間ニ位スル死亡率ハ其減少ノ程度モ亦中間ニ位セルヲ見ル。

國	年	1861-70	1871-80	1881-90	1891-1900	1901-10	減少數
		1861-70	1871-80	1881-90	1891-1900	1901-10	減少數
匈	牙	—	四・一	三・七	三・〇	三・四	一五・七
露	亞	三・九	三・七	三・三	三・五	二八・〇	七・七
塞	耳	三・七	三・四	三・三	一七・〇	二・四	一〇・九
埃	利	三・七	三・五	三・三	六・六	三・三	八・二
西	班	三・〇	三・〇	三・七	三・五	三・〇	五・四
伊	太	三・〇	三・〇	三・一	三・二	二・五	八・四
獨	逸	二・九	二・九	二・七	三・二	一八・七	八・五
和	蘭	二・四	二・四	二・〇	一八・四	一五・二	九・一
葡	牙	二・四	二・三	二・六	二・五	一九・九	四・四
佛	西	二・六	二・七	三・一	二・五	一九・四	四・四
瑞	義	二・八	二・五	二・八	一九・〇	一七・〇	六・五
白	耳	二・四	二・六	二・五	一九・二	一六・六	六・〇
芬	蘭	三・六	二・二	二・〇	一九・六	一九・〇	五・三
蘇	蘭	三・二	二・六	一九・三	一八・七	一六・三	五・三
英	蘭	三・五	二・四	一九・一	一八・三	一五・三	六・一
瑞	典	二・二	一八・五	一八・六	一七・五	一四・五	五・一
愛	蘭	一・六	一八・四	一八・九	一六・四	一四・九	三・四
諸	威	一・〇	一七・〇	一七・〇	一六・三	一七・五	〇・九

排列ノ順序ハ一八七〇—八一年ニ於ケル死亡率ノ大サニ依リシモノナルガ、之ヨリシテ一九〇一—一〇年ニ至ル死亡率減少ノ大サハ大體ニ於テ此順序ト相一致セルヲ見ル可シ。蓋シ其理由ハ自ラ明ナルモノアリ。死亡率ノ減少ニハ一定ノ限界アリ。今正常壽命(天壽)ヲ以テ七十年トスレバ、人口數ニ増減ナキモノト假定センカ、死亡率ノ最小ノ極限ハ一四・三ヲ下ル事ナカル可シ。事

1) 1901-1905 2) 1863-71 3) 1901-03
 4) Mombert, Bevölkerungsbewegung, 1907. S. 5. Most, Bevölkerungswissenschaft. 1913. S. 68.

實ニ於テ現ハレタル最小ノ死亡率ハ一〇以下ニ達シタル事アリト雖、此ノ如キハ濠洲植民地ノ特別ナル事情ニ基ヅケル一時的現象ニ過ギズ。殊ニ、幼兒ノ死亡率ノ割合ニ大ニシテ、マタ青年ニ於ケル死亡ノ到底全ク避ク可カラザル事ヨリ推セバ、前述ノ假定ノ下ニ於ケル死亡率ハ決シテ彼ノ極限ニ達シ得ル事無カル可シ。然ルニ拘ハラズ、丁抹諾威ニ於テ既ニ此極限以下ノ死亡率ノ實現セラレタル(丁抹一九一〇年ニ於テ一二・九諾威同年ニ於テ一三・五)所以ハ次ノ二ノ事情ニヨル。

人口ノ自然増加ハ其一ナリ。更ニ之ヨリモ重要ナルハ福利ノ増進ニ伴ヒ醫術衛生ノ進歩ノ愈著シキ事コレナリ。實ニ此進歩ハ其速度ノ急速ナル程、出生率ヲ其自然的ナル極限以下ニ低下セシムル作用ヲ有ス。其進歩ノ一タビ停止セラル事アランカ、死亡率ハ反動的ニ一タビ上昇セザルヲ得ザル可シ。學者ノ中近キ將來ニ死亡率ノ増加ヲ豫期スルモノアルハ當然ノ事ナリト云ハザル可カラズ。ソハ何レトモアレ、死亡率ノ減少ニハ此ノ如ク一定ノ限界アリ。而シテ其減少ガ此限界ニ近キ程困難ナル事モ自ラニシテ推察セラル可シ。同様ニ此限界ヲ去ル事遠キ場合ニ於テハ死亡率ノ減少容易ナルモノアリ。カクテ一定ノ原因ニヨリテ死亡率ノ減少生ジ來ランカ。減少ノ大サハ其困難ナル所ニ小ニシテ其容易ナル所ニ大ナルハ自ラノ勢ナリト云ハザル可カラズ。前掲死亡率ノ減少ノ國際的比較ハ或程度ニ於テ此提言ヲ證明セルモノナルガ、更ニ進ミテ、都鄙別地方別等ニ就キテ考察スル時、其關係ノ一層明ナル事ヲ認メ得可キナリ。

一八七一年ヨリ一九〇四年ニ至ル間ノ普魯西及ビばいゐるんノ死亡率變動ニ就イテ見ルニ、出生率ノ大ナリシ地方其減少亦大ナルヲ知ル。

一七七一—一八〇〇年 ノ死亡率 三三・〇—元・九 二六・九—七・二	一九〇一—〇四年ニ 於ケル減少 八・八 七・九	一八〇一—〇四年 ノ死亡率 二七・一—二・八 二五・五—三・四	一九〇一—〇四年ニ 於ケル減少 七・〇 五・二
--	----------------------------------	--	----------------------------------

一七七一—一八〇〇年ノ死亡率ノ特ニ大ナリシ地方及ヒ特ニ小ナリシ地方ノミヲ取リテ集計スレバ、次ノ如シ。

一七七一—一八〇〇年 ノ死亡率	一九〇一—〇四年ニ 於ケル減少	一八〇一—〇四年 ノ死亡率	一九〇一—〇四年ニ 於ケル減少
ばいえるん(らいん右岸) 三・〇	八・四	りゆ うべつく 三・八	一八・八
ぢゆるてんべるく 三・六	一〇・七	めくれんぶるくすこ 三・〇	二・五
さくせんーあるてんぶ 三・三	八・五	しゆれすおくほるすたいん 三・八	五・三
るく 三・三	一四・七	めくれんぶるくーしゆ 三・四	二・七
伯 林 三・二	九・五	ふりん 三・九	六・二
ほまへんつわれるん 三・五	一〇・四	しやうむべるくーりつべ 三・九	四・九
平 均		平 均	

而シテ、死亡率ノ最高ナル地方ト最低ナル地方ニ於ケル其差異ハ次表ノ示スガ如ク漸次ニ減少シタリ。

(一七七一—一八〇〇) 一・七 (一八〇一—〇四年) 一〇・一 (一八〇一—〇四年) 九・五 (一九〇一—〇四年) 三・一

同一ノ事情ハ都市ト田舎トノ區別ニ就イテモ亦、之ヲ認ムル事ヲ得可シ。普通都市ノ死亡率ハ田舎ノ死亡率ヨリモ遙ニ高キヲ常トス。若シ死亡率均等ノ法則ニシテ眞ナラシメバ、都市死亡率ノ減少ハ田舎ノ死亡率減少ヨリモ大ニシテ、其結果ニハ死亡率ハ相接近スル傾向ヲ有ス可キナリ。而シテ、例ヘハ、普魯西ニ於ケル事實ノ示ス所亦此ノ如シ。

5) Mombert, a. a. O. S. 9. ff.

	都市	田舎	都市	田舎	都市	田舎	都市	田舎
一八四一—五	三・五	元・八	一七七一—七	三・四	六・三	一八六一—七	二・七	二五・四
一八六一—二	二・九	七・八	一七六一—〇	二・九	二・六・三	一八六一—五	二・四	二四・五
一八六一—七	三・八	七・八	一八六一—五	二・八	二・六・五	一八六一—〇	三・三	三・三

都市ノ出生率減少ハ特ニ大ニシテ、遂ニ田舎ノ出生率以下ニ下レルヲ見ル。勿論此死亡率ノ接近ハ疑フ可カラザル事實ナレドモ、田舎ノ死亡率ノ却リテ高キガ如クニ見ユルハ一ノ視的錯覺ニ過キズ。都市ト田舎トニ於ケル年齡構成ハ著シク變化シ。都市ハ殊ニ死亡率低キ年齡階級ノ増加ヲ見タリ⁶⁷⁾

[illegible]

6) Kaup, Ernährung u. Lebenskraft, 1910. S. 20.

7) Kaup, a. a. O. S. 28.

8) Oldenberg, Ueber den Rückgang der Geburten und Sterbeziffer. Archiv. f. Sozialwiss. u. Sozialpol. 1911 S. 482.

都市ト田舎トニ於ケル死亡率均等ノ傾向ハマタ常ニ其他ノ國ニ於テモ認ムル事ヲ得可シ⁽⁹⁾

英國			
都市	田舎	都市	田舎
一八五一・一六〇	二四・七	一九・九	二四・六
一八六一・一七〇	二四・八	一九・七	二四・六
一八七一・一八〇	二四・一	一九・〇	二四・六
一八八一・一九〇	二〇・五	一七・五	二四・一
一八九一・二〇〇	一八・九	一六・七	二四・一
		一九・九	二六・〇
		一七・四	一八・一

此死亡率ノ接近ヲ更ニ年齡階級ニヨリテ分析スレバ次ノ如シ。⁽¹⁰⁾

獨逸ニ於ケル死亡率ノ變動

大都會			
都市	田舎	都市	田舎
〇—	一—	一五—	六〇以上
一八九六	二七・七	二五・三	六五・六
一八九七	二八・〇	二五・〇	六五・六
一八九八	二八・〇	二五・〇	六五・六
一八九九	二八・〇	二五・〇	六五・六
一九〇〇	二八・〇	二五・〇	六五・六
一九〇一	二八・〇	二五・〇	六五・六
一九〇二	二八・〇	二五・〇	六五・六
一九〇三	二八・〇	二五・〇	六五・六

而シテ同様ノ事實ハマタ乳兒死亡率ノミニ於テモ明ニ認メラルル事前掲ノ表ニヨリ知ラルルガ如シ。更ニ之ヲ小都市ニ就テ見ルモ同様ナル結果ヲ得可シ。

獨逸乳兒死亡率(公生)

全國平均	一八八七—一八〇	一八八一—一八五	一八八六—一九〇	一八九一—一九五	一八九六—二〇〇	一九〇一—二〇四
	一九・九	一九・四	一九・一	一九・五	一九・七	一九・三

論說 生死減小進行ノ法則—人口學的征服

第二卷 (第六號四三) 一〇一五

9) Kaup, a. a. O. S. 22.

10) Mombert, a. a. O. S. 37.

伯林	二七・三	三三・九	四・三	三七・六	一九・三	八一・一
其他／大都市	三九・七	三三・四	二九・五	三四・九	二〇・九	一九八・八
都市	三二・五	三二・四	三〇・一	三〇・六	一九四・八	一七五・三
田舎	一八・四	一八・七	一六・八	一八・七	一八五・一	一七五・三

同一ノ傾向ハ男女別死亡率ノ減少ニ就イテモ亦明ニ之ヲ認ムル事ヲ得可シ。男女ノ死亡率ハ少シク相異ナリ。年齢階級ニ從ヒテ多少ノ相違ハアレドモ、概シテ男子ノ死亡率ハ女子ノ死亡率ヨリモ大ナルヲ常トス。而シテ、死亡率ノ減少ハ此場合ニ於テモ、死亡率其物ノ大ナル男子ニ大ニシテ、死亡率ノ小ナル女子ニ小ナリ。今獨逸ニ於ケル二十歳迄ノ男女年齢階級別死亡率ノ變動ヲ表示ス可シ。二十歳以上ノ年齢ニ於テモ同一ノ傾向ハ明ニ認メラル。

年次	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一八七五	二九六	二四三	七〇	七六	七五	七〇	三六	二四	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八七六	二六六	二二五	七〇	七五	七五	七〇	三六	二四	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八七九	二六六	二二五	七〇	七五	七五	七〇	三六	二四	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八八〇	二七三	二二六	七三	七三	七三	七三	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八八二	二八四	二六六	七三	七三	七三	七三	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八八五	二八七	二九三	七六	七六	七六	七六	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八八八	二九〇	二八一	七六	七六	七六	七六	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八九一	二九三	二八一	七六	七六	七六	七六	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八九四	二九六	二八八	七六	七六	七六	七六	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一八九七	二九九	二九三	七六	七六	七六	七六	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一九〇〇	三〇〇	三〇〇	七六	七六	七六	七六	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一九〇三	三〇四	三〇四	七六	七六	七六	七六	三七	二五	六	六	〇	〇	〇	〇	〇	〇

階級ノ區別ガ出生率ニ差別ヲ生ズル事ハ明白ナル事實ナルガ。ソハマタ死亡率ニ差別ヲ生ゼシム
下級ノ死亡率ハ上級ノ死亡率ヨリモ低キヲ常トスル事下層ノ出生率ガ上級ノ出生率ヨリモ低キト

趣ヲ同ジクス。Beniston de Châteaufort^ハ巴里ニ於ケル上級ノ人人一千六百人并ニ貧民街ノ人口二千^人ニツキ十年間(一八二〇—一八三〇年)ノ死亡率ヲ檢シタルニ上級ノ死亡率ハ下級ノ死亡率ニ比シテ甚ダ小ナリキ。

年 齡	一 般	上 級	貧 民	年 齡	一 般	上 級	貧 民	年 齡	一 般	上 級	貧 民
三〇—四〇	二五	二六	二五	五〇—六〇	三二	二九	三〇	七〇—八〇	二四	二〇	二二
四〇—五〇	二五	二五	二五	六〇—七〇	三六	三〇	三〇	八〇—九〇	二六	二三	二五

Clay^カ英國ノ貴族商人勞働者ニ就イテ出生數百ニ對スル幼兒殘存ノ割合ヲ研究シタル結果モ亦相同シ。

滿一年ニ於ケル殘存者數	滿十年ニ於ケル殘存者數
貴族ノ子 二〇	二〇
商人ノ子 七〇	五五
勞働者ノ子 六六	三六

Körösi^ガ平均壽命ノ階級別研究ノ結果モ亦同一ノ提言ヲ確ムルニ足ル。

上 級	中 級	勞働者及農民	五歲以下ニテ死スルモノ	五歲以上ニテ死スルモノ
一歲五ヶ月	一歲二ヶ月半	一	五十二歲	四十六歲一ヶ月
				四十一歲七ヶ月

其他 Villermé, Manouvrier, J. Bertillon^ノ研究マタ同一ノ結果ニ達セリ。職業別ニヨル死亡率ノ研究ハ既ニ多數ニ上レルガ、マタ下級ノ死亡率ノ大ナルヲ示サザルモノナシ。此ノ如ク、死亡率ノ階級別ニヨリテ著シキ差異アル事ハ動カス可カラザル事實ナルガ、吾人ハ此場合ニアリテモ、其減少ハ常ニ死亡率ノ大ナル下級ニ大ニシテ、死亡率ノ小ナル上級ニ小ナル事ヲ信ズ。死亡率ノ減少ガ死亡

率其モノノ大サニ比例スル事ハ死亡率ノ差異アル他ノ一切ノ場合ニ於テ確ナル事實ナルノミナラズ、ソハ容易ニ説明シ得ラル可キ所ナリ。然ラバ之ヲ以テ一ノ法則ト見做スニ何ノ差支ナク、マタ一轉之ヲ基礎トシテ、富者ニ於ケル死亡率減少ノ小ナル事ヲ推測シ演繹スルモ何等事理ニ背ケル事ナシト信ズ、タダ吾人ノ遺憾トスル所ハ、階級別死亡率ノ變動ヲ徵檢ス可キ統計的材料ノ殆ンド存在セザル事コレナリ。僅ニ斷片的ナル一表ヲ左ニ添加ス。コハ Conrad ガ二乃至五歳ノ幼兒死亡率ノ變動ヲ階級別ニ調査シタル結果ニヨル。I II III IV ハ職業ニヨリテ分チタル階級の區別ニシテ、I ハ上級ノ職業ヲ含ミ、II ハ重ニ手工業者 III ハ重ニ下級官吏小賣商 IV ハ勞働者ヲ含ム。¹²⁾

	I	II	III	IV
一八六〇—六四	二・〇〇	三・九三	一九・九七	二九・六六
一八六五—六九	八・九三	三・八一	一六・七五	二九・九一
一八七〇—七四	八・二三	二六・八元	一六・〇元	一七・四三

以上述べ來レル所ニヨリテ、死亡率均等ノ法則ノ内容ヲ明ニシ得タリト信ズ。若シ、生死平行法則ヲシテ確實ナルモノナラシメバ、ソハ此法則ト相結合シテ如何ナル作用ヲ現ハス可キカ。

三 生死平行法則ノ歸結如何

生死平行法則ハ靜的ト動的、換言スレバ nebeneinander, nacheinander ノ二面ヲ有ス。靜的意義ニヨレバ、死亡率ノ大ナル所ハ出生率大ナリ、死亡率小ナル所ハ出生率亦小ナリ。動的意義ニヨレバ、死亡率高マレバ出生率亦高マリ、死亡率降レバ出生率亦降ル。吾人ノ今先ヅ利用セントスル所ハ

12) Conrad, Einfluss von Lebensstellung u. Beruf auf d. Mortalitätsverhältnisse. 1877. S. 42.

其ノ動的意義ニアリ。勿論此平行法則ノ力説者タル J. Bertillon ハ出生率死亡率ノ平行的關係ニ分量的規定ノ存在スル事ヲ明記セズ（彼ガ Farr ノ言ヲ引用シタル所ニヨレバ此分量的規定ヲ否認スル理由ナシト信ズ）。換言スレバ、彼ノ説ク所ハ出生率ノ上昇又ハ低下アレバ死亡率ノ上昇又ハ低下アリト云フノミニシテ、死亡率ノ上下ニ比例シテ出生率ノ上下アリト明言セルニ非ズ。然レドモ、一方、平行法則ノ因果の説明ヲ考フル時、他方、動的平行法則ヲ如何ナル場合ニモ妥當ナラシメントスル時ハ、此比例的關係ハ當然是認セラレザル可カラズ。即チ若シ、主トシテ死ガ生ヲ規制スルモノナラバ、死亡率減少ノ大小ヲ伴フ可ク、死亡率ノ微小上下ニ應ジテモ出生率ノ之ニ應ズル上下アリ得ンガ爲ニハ、二者ノ平行關係ガ數量的比例のナラザル可カラズ。此ノ如ク解釋シ來レバ、生死ノ平行法則ハ死亡率減少ノ大ナレバ出生率ノ減少亦大ニシテ、前者小ナレバ後者亦小ナル事ヲ意味ス。之ヲ前ニ述ベタル死亡率均等ノ法則ト併セ考フル時ハ次ノ如キ結論ヲ得可シ。死亡率ノ大ナル所ハ出生率ノ減少亦大ナリ、死亡率ノ小ナル所ハ出生率ノ減少亦小ナリ。

而シテ此命題ハ生死平行法則ノ靜的意義ヲ併セ考フル時ハ容易ニ他ノ命題ニ書キ替フル事ヲ得可シ。此靜的意義ニヨレバ、死亡率ノ大ナル所ハ出生率ノ大ナル所ナリ、死亡率ノ小ナル所ハ出生率ノ小ナル所ナリ。故ニ、前ノ命題ノ中、死亡率ノ大小ニ出生率ノ大小ヲ置キ替フルモ、若シ彼ノ平行法則ヲシテ眞ナラシメバ、何等ノ差支無カル可シ。カクテ吾人ハ次ノ結論ヲ得。出生率ノ大ナル所ハ出生率ノ減少亦大ナリ、出生率ノ小ナル所ハ出生率ノ減少亦小ナリ。而シテ、此命題

テ餘アルニヨルナリ、カクテ、生死平行法則ハ其靜動何レノ形態ノ下ニ於イテモ、文字通りニ是認セラルル事能ハズ。吾人ハタダ其捉ヘタル一核心即チ、死亡ハ出生ヲ促進スト云フ事實ヲ認メ得ルノミ。從ヒテ此法則ヲ根據トシタル前掲ノ推想ノ事實ヲ示サザル可キ事ハ豫メ信ジ得可キ所ナリ。

四、出生率増差ノ法則

死亡率ノ減少ハ死亡率ノ大ナルモノニ大ニシテ、自ラ死亡率ノ均等ヲ誘致セントスル傾向アル事上ニ述ベタルガ如シ。而シテ出生率モ亦之ト等シク、其大ナル所ニ減少ノ勢強カラザルカ、從ヒテ自ラ相平均スル傾向ナカラザルカトハ、前ニ到達シタル問題ナリ。然ルニ事實ハ之ト正反對ノ傾向ヲ示セリ。出生率ノ減少ハ出生率ノ既ニ小ナル所ニ却リテ大ニシテ、其大ナル所ニ小ナリ。カクテ、各地方各國各階級間ニ於ケル出生率ノ差異ハ漸次ニ増加シテ、其間愈隔絶スルヲ免レズ。此關係ヲ假ニ名ケテ出生率増差ノ法則ト云フ。勿論、此關係ハ吾人ガタダ近代の出生率減少ノ既ニ存在セル歐洲諸國ニ就イテノミ考察シ得タル所ニシテ、從ヒテ其妥當性モ僅ニ近代文明國ニ限ラレタル一ノ經驗律ニ過ギズ。此範圍ヲ超エテ其他ノ時代方處ニ見ル時、果シテ如何ナル程度ノ妥當性ヲ有スルカハ自ラ別ノ攻究ヲ要スル問題ナリ。

先ツ一國內ノ各地方又ハ行政區ニ就テ見ルモ、出生率ノ減少ハ概シテ、出生率自體ノ低キ所ニ大ナリ。今 Mombert ノ記ス所ニヨルニ、一八八〇年以來一九〇一年マテ、獨逸各行政區ニ於ケル出

率ハ三〇・五ヨリ二六・八即チ三九ダケ減少シタルニ對シ、人口四萬以上ノ都市ノ妊孕率ハ二九・三ヨリ二三・八即チ五・五ダケ減少シタリ。更ニ他ノ區分ニヨリ、都市ヲ妊孕率ノ大小ニ從ヒテ三分シ、其減少ヲ見ルニ此關係マタ明ナリ。

	一八八〇—八一	一九〇〇—〇一	減少率
出生率ノ小ナル都市	三六	三六	一五・七
其普通ナル都市	三〇・九	二七・五	一一・六
其大ナル都市	二七・五	二二・五	二二・一

白耳義、丁抹、瑞典等ニ於テモ、大小都市ノ出生率ノ間ニ同様ナル關係ノ存スル事ハ前掲ノ表ニヨリテ之ヲ知ル事ヲ得可シ。此ノ如ク吾人ノハ都鄙ノ區別、及ビ大小都市ノ區別ニ就イテ出生率増差ノ法則ノ存スルヲ見タリ。然レドモコハ敢テ出生率ノ大小其物ノ中ニ一種ノ神秘的勢力アリテカカル傾ヲ生ズルニ非ズ、複雑ナル事情ニヨリテ決定セラルル出生率減少ノ裡ニ自ラ此ノ如キ傾向ノ看取セラルト云フニ外ナラザルナリ。從ヒテ、社會的事情ノ特殊ナル場合ニアリテハ此關係ノ必ズシモ現ハレザル事アラン。從來此點ニ關シテ特ニ疑問トセラレタルハ佛國及ビ英國ナリ。工業ノ發達ハ出生率ヲ減少セシムルヨリハ寧ロ減少ヲ防止スル傾向ヲ有スト見ル一派ノ論者ハ此等ノ國ニ於テ出生率ノ減少ハ却リテ工業ノ隆盛ナル都市又ハ都市地方ニ於テ小ナル事ヲ説ケリ。²¹⁾然レドモ此主張ハ少クトモ佛蘭西ニ就イテハ當ラス。佛蘭西工業ノ一中心地ハ Nord et Pas de Calais ナルガ其出生率ノ特ニ大ナルハ國境ニ位スル特殊ノ事情ニ本ツクモノト考ヘラルルカ故ニ姑ク措ク。其他ノ工業地方ニ就イテ見ルニ、十五乃至四十歳ノ女子ノ妊孕率ハ一八七六—七七一年ヨリ一八九五—九六年ニ至ル迄、全國平均ハ $11\frac{1}{2}$ ヨリ $9\frac{3}{4}$ ニ低下セルニ對シ、Bouche-du Rhone ハ

其低下 11 $\frac{1}{2}$ ヨリ 10 $\frac{1}{2}$ Loire < 12 $\frac{1}{2}$ ヨリ 9 $\frac{1}{2}$ ヲ Seine < 10 ヨリ 8 ニ Rhône < 10 ムン 7 ニ
 マタ Bordeaux フ合メル Gironde < 8 $\frac{1}{2}$ ヨリ 7 $\frac{1}{2}$ ニ達セリ。タダ英國ニ就イテノミハ、都市ノ出生
 率減少ノ必スシモ田舎ノソレヨリ大ナラザル事實アルヲ認メザル可カラザルナリ。一八八一年ヨ
 リ一九〇三年マデノ間ニ於ケル出生率減少ハ都市地方ニ於テハ一五% (三二・一〇—二七・二〇)、
 其他ノ地方ニ於テハ却リテ之ヨリモ大ニシテ一八% (三・四・〇九—二八・〇三)ヲ算ス。勿論コハ決
 シテ、工業ノ發達カ人口ノ減少ヲ防止スル事ノ證據ト見ナス可キニ非ス。何トナレハ田舎ニ於ケ
 ル急速ノ出生率減少ハ重ニ工業ノ田舎ニ移動スル事著シカリシ結果トシテ生ジタルモノニシテ、
 更ニ、都會生活ノ模倣ノ漸ク強キヲ加ヘタル事亦之ヲ助長セリ。然レトモ兎ニ角ニ、出生率ノ減
 少ガ其高キ田舎ニ却リテ大ナル事實ガカカル特殊ノ事情ニヨリテ生ジタル一事ハ否定シ去ル可キ
 ニ非ズ。ナホ、濠洲ニ於テモ亦出生率増差ノ法則ニ對スル多少ノ例外ヲ發見スル事ヲ得可シ。

びくとりや洲一般出生率

首府	一八六五	一八七〇	一八七五	一八八〇	一八八五	一八九〇	一八九五	一九〇〇	一九〇一	一九〇二
地方	四三・五	三七・七	三三・五	三二・九	三二・四	三二・七	三二・六	三二・六	三二・八	三二・八
地方	三六・八	四・元	元・六	三六・三	三六・五	三六・三	三六・四	三六・五	三六・五	三六・三

出生率ノ高キ首府ニ於テ減少率ハ却リテ大ナリ。にゆうさうす・ゑえるすニ於テモ同様ノ事實ヲ
 認ムル事ヲ得。

にゆうさうす・ゑえるす洲一般出生率

首府	一八八〇—一八四	一八八五—一八九	一八九〇—一九四	一八九五—一九九	一九〇〇—一〇四	一九〇五—一〇八
地方	四〇・八	四〇・五	四〇・二	三九・七	三九・二	三九・〇

論說

生死減少逆行ノ法則—人口學の征服

第二卷 (第六號五五) 一〇二七

出生率ノ國際的比較ニ眼ヲ轉ズレバ、増差ノ事實ハ階級別都鄙別ニ就イテ見タルガ如クニ明確ナラズ。

出生率ノ順序ニ 排列シタル國名	1871-1900	1900-1910	1910-1920	減少ノ割合	1901-1910	1911-1920	減少ノ割合
佛蘭西	41.0	40.0	39.0	減少	40.0	38.0	減少
露亞	40.3	39.1	38.0	減少	38.0	36.0	減少
匈牙利	39.4	38.5	37.5	減少	37.5	35.5	減少
塞耳維	40.5	39.7	38.7	減少	38.7	36.7	減少
獨逸	40.1	39.1	38.1	減少	38.1	36.1	減少
壤太	40.0	39.0	38.0	減少	38.0	36.0	減少
伊太利	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
西班牙	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
和蘭	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
英蘭	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
白耳	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
丁義	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
諾威	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
瑞典	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
愛典	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少
佛蘭西	39.9	38.9	37.9	減少	37.9	35.9	減少

出生率三七・〇ヲ界トシテ諸國ヲ二分シ、西班牙伊太利ヲ其界トナス可シ。一八七一一八〇年ヨリ一八九〇——一九〇〇年マデノ減少率ヲ見ル時ハ明ニ、出生率ノ大ナル部分ニ小ニシテ、其小ナル部分ニ大ナル事ヲ認メ得可シ。更ニ進ミテ、一八七一一八〇年ヨリ一九〇一一一九〇年マデノ減

23) Mombert, Ueber den Rückgang der Geburten etc. Archiv f. Sozialw. u. Sozialp. 34. S. 811

少ヲ見ルニ、大體ニ於テ此關係ハ失ハレズ、タダ出生率ノ小ナル中ニ就イテモ其比較のニ大ナル部分ニ於テ減少ノ稍著シキヲ認ムルナリ。何レニセヨ、此國際的比較ニ於テモ亦、出生率ノ減少ハ死亡率ノ減少ノ如ク決シテ均等の傾向ヲ有セザル事ハ明白ナリ。此場合ニ於テハ少クトモ出生ノ減少率ハ出生率ノ大サニ比例スル事無シ。

轉ジテ出生率減少ノ階級的差異ヲ檢スル時ハ、所謂出生率増差ノ法則ノ常ニ必ズ妥當ナルヲ見ル可シ。上下貧富ノ出生率ハ頗ル其大サヲ異ニスルモノナルガ、出生率ノ漸次減少スルニ伴ヒテ此懸隔ハ愈其著シキヲ加フ。タダ都市ノミニ就キテ檢スルニ、若シ富有區ト貧困區トノ平均出生率ヲ比較スル方法ニ由ル時ハ、人爲の出生制限ノ行ハレザル時ニ於テハ僅ニ二〇乃至三〇%ニ過ギズ。然ルニ、出生率ノ減少ノ盛ニ行ハルル近時ノ文明國ニ於テハ五〇乃至七五%ニ及ベルヲ見ル。貧富ト出生率トノ關係ハ近時ニ至リテ密接ノ程度ヲ倍加セリ (Heton) ト稱セラルルモノ故ナキニ非ズ。蓋シコレ、出生率ノ減少ハ一様ナラズシテ、其本來小ナリシ上級ニ著シク大ニシテ、其本來大ナリシ下級ニ極メテ小ナル結果、上下ノ間ノ差異ノ愈強キヲ加ヘタルニ外ナラザルナリ。而シテ、此階級ニ於ケル増差ノ事實少クトモ現今ニ至ルマデ殆ンド例外ナク行ハレタリ。カクテ出生率減少ハ其階級的比較ニ就テ見ルモ、都鄙ノ區別ニ就テ見ルモ、更ニマタ國際的比較ニ就テ見ルモ、大體上常ニ増差ノ法則ニ伴ヒテ、大ナル出生率ト小ナル出生率トノ差異ハ其間益隔絶スルニ至ル傾向ヲ有ス。而シテ、此増差ノ因果的説明ハ其關鍵ヲ階級的増差ノ考察ニ覺ム可シ。出生率ノ階級的増差ノ由リテ來ル所ハ一ニ力ノ欲望ニアリ。モトヨリ、出生率ハ本來物質的

福利ノ大ナル階級ニ小ニシテ貧困ナル階級ニ大ナリ。然ルニ、力ノ欲望ハ漸次上級者ヲ驅リテ出生制限ニ向ハシム、コ、ニ於テ上下ノ出生率ハ愈其差異ヲ加ヘザル能ハズ。加之、力ノ欲望ハ飽ク所ヲ知ラザルト共ニ、富力ノ増進ハ底止スル所ナクシテ益此欲望ノ強度ヲ強メ、其影響ハ出生率ノ上ニ及ビテ減少ノ速度ハ常ニ上級ニ大ナリ。都鄙別及地方別ニヨル増差及ビ國際的ナル増差モ亦之ト同一ノ事情ニ本ヅク。田舎ニ比シテ都會、小都會ニ比シテ大都會、文化ト產業ノ發達ノ幼稚ナル國ニ比シテ文化ノ爛熟ニ向ヘル國、コレヲモノハ多クハ其福利及ビ之ニ伴ヘル精神の發達ノ影響ヲ受ケテ本來ノ出生率モ比較的ニ小ナルヲ常トス。勿論、カカル社會的事情ノ外地理的歴史的事情ノ出生率決定ノ上ニ影響ヲ及ボスモノアルガ故ニ、一概ニハ論ジ難キモ、大體ニ於テカカル關係ノ存スル事ハ看取スルニ難カラズ。然ルニ、力ノ欲望ノ新ニ出生制限ノ作用ヲ現ハスヤ、其強度ハ自ラ前ニ述ベタルガ如キ事情ニヨリテ、福利ノ大ニシテ文化ノ著シキ所、即チ既ニ出生率ノ小ナル所ニ於テ高カラザルヲ得ズ。出生率減少ガ都市ニ於テ一般ニ田舎ニ於ケルヨリモ大ニ、大都會先進國ニ於テハ小都會後進國ニ於ケルヨリモ大ナリト云フ事實ハ此ノ如クニシテ生ズ。加之、力ノ欲望ノ飽ク事ヲ知ラズ、其満足ノ爲ニハ益々出生ノ制限ヲ要求スルノミナラズ、既ニ福利ノ大ナル所ニ於テ、其増進ハ著シク、從ヒテ力ノ欲望ノ新ナル發達モ亦促進セラシム。更ニマタ、力ノ欲望ノ模倣的流下ニヨリテ、出生制限ガ中下ノ階級ニ及ブ事モ亦、福利ノ高キ地方ニ著シ。此等ノ事情ハ相合シテ自ラ、小ナル出生率ノ減少率ヲシテナホ不斷ニ大ナル出生率ノ減少率ヨリモ大ナラシムルニ至レルナリ。

五、生死減少逆行ノ理由

死亡率ハ均齊ニ向ヒ出生率ハ愈懸隔ヲ加フ、此事實ノ由リテ生ズル根據如何ハ次ニ考フ可キ問題ナリ。吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ此根據ニニアリ、其一ハ出生率死亡率ノ極少限ノ相異ナル事ニシテ、其二ハ出生率ノ相對的福利ニ制約セラレ死亡率ノ絕對的福利ニ制約セラルル事ナリトス。死亡率ノ減少ニハ明確ナル限界アリ。今ノ變調ハ既ニ數多ノ國ニ於テ此限界一四下ラシメタリ而シテ、此限界ニ近ヅクニ從ヒテ一層ノ低下ハ困難ナル可ク、從ヒテ大ナル死亡率ノ減少ハ自ラ容易ニ、小ナル死亡率ノ減少ハ自ラ困難ナルヲ免レズ。出生率ニ至リテハ頗ル之ト趣ヲ異ニス。其減少ニハ少クトモ思惟ノ上ニ於テ限界ナク殆ンド零ニ近ヅク事ヲ得可シ。カルガ故ニ、個人ノ欲望ノ命ズル所ニ從ヒテ出生制限ハ益盛ニ行ハレ、小ナル出生率モ其減少ニ於テハ却リテ大ナル出生率ニ超ユル事ヲ得。今日出生率減少ノ出生率ヲ均等ナラシムル傾向ヲ有セザル理由ノ一ハコニアリ。タダ注意ス可キハ、人口ノ減少ガ國家ノ一大不祥事ナル以上、而シテ全ク繼嗣ヲ缺ク事ノ個人ノ不幸ナル以上ハ、出生率ノ減少ニ少クトモ意識的計劃的ノ限界アラザル可カラズ。カカル限界ハ今日ノ佛國ノ出生率ヨリモ更ニ小ナル可ク而モ其大サガ果シテ幾何ナル可キカハ今ココニ斷言シ得ル限ニ非ザレドモ、此限界ニ近クニ連レテ、出生率ノ減少ニモ早晚均等ノ法則ノ行ハルルニ至ル事ハ想像シ得ラザル事ニ非ズ。吾人ハタダ近年ノ事實ニ就イテ懸隔ノ著シキヲ加ヘタル事實ヲ見、ソノ根據ガ出生率ノ無限低下ノ可能ニアリト説クノミ。

(註) 出生率減少ノ極限ハ思フニ社會的要求ニヨリテ定マラズシテ個人的要求ニヨリテ定マラン。蓋シ個人ハ出生制限ノ最後ノ決定權ヲ有スレバナリ。而シテ個人的要求ニヨリテ此極限ヲ想像スルニ、夫婦ノ間ニ一兒ヲ舉グル丈ノ大サナラン。而シテ此大サハ吾人ノ信ズル所ニヨレバ、今日ノ佛蘭西ノ出生率ノ二分ノ一、出生率最高極限(夫婦ニツキ二十二兒)百五十ノ十二分ノ一、即チ千ニツキ約七ナル可シ。²⁴⁾

然レドモ、上ニ述べタル所ハ消極的の説明タルニ止マル。一定ノ都合ヨキ條件ダニ存在セバ、出生率ノ差異ノ愈加ハリ死亡率ノ益均等ニ向フノ可能ナルヲ説キシノミ。實際ニ於テ如何ナル條件ノ存在スレバ此可能ガ事實トシテ實現セラレタルヤハ、自ラ別ノ問題ナリ。死亡率ノ減少ハ重ニ福利ノ増進ニヨリテ生ジ來レリ。而シテ此福利ノ増進ハ殆ンドアラユル階級、地方、邦國ヲ通ジタル現象ナルガ故ニ、死亡率減少ノ傾向ハ此等ノ何レニモ略一樣ニ作用シタル可ク、從ヒテ減少ノ難易ニヨリ自ラ減少率ニ差等ヲ生ジタル可キナリ。出生率ノ減少ニ關シテハ然ラズ、決定的意義ヲ有スルモノハ福利其物ニ非ズシテ、福利ト力ノ欲望トニヨリテ定マル相對的福利ナリ。然ルニ力ノ欲望ノ發達ハ大抵福利ノ高キモノニ於ケル程著シキガ故ニ、相對的福利ノ愈小ナルハ上流階級、都市、先進國ニアリ。下層ノ階級、田舎、後進國等ハ福利ノ稍増進スル事アルモ力ノ欲望ハ其程度比較的ニ弱ク其發達比較的ニ少シ、從ヒテ相對的福利ノ減少ハ其速度ニ於テ遅カラザルヲ得ズ。カクテ出生率減少ノ傾向其物ハ其作用實ニ差別的ノモノナリ。出生率ノ小ナルモノニ強クシテ、出生率ノ大ナルモノニ弱カラントス。前述ノ如ク或程度マデハ出生率其物ノ大小ニヨリテ其減少ニ難易アルモノニ非ズトセバ、此差別的作用ハ自ラ事實ニ於ケル減少率ヲシテ愈著シキ差等ヲ有セシメザル能ハザルナリ。

六、人口學の征服

出生率ノ減少ハ底止スル所ヲ知ラズ、而シテ其速度ハ常ニ小ナル出生率ニ大ナル結果トシテ、異ナレル社會ノ出生率ハ愈其差ヲ加フ。之ニ反シテ、死亡率ノ減少ハ益之ヲシテ均齊的狀態ニ向ハシム。減少ノ方向、一ハ其大ナルモノニ大ニシテ他ハ其小ナルモノニ大ナリ。此逆行の關係ハ人口ノ相對的増減ノ上ニ著シキ影響ヲ有ス可シ。此逆行ノ法則ヨリ推シテ考フルニ、小ナル出生率ヲ有スル社會ハ全ク暗黒ト衰亡トノ前ニ立テリ。其出生率ハ減少特ニ速ニシテ底止スル所ヲ知ラザル限り、遂ニハ人口ノ減少ヲ誘致スルニ至ラズバ止マザラン。而シテ他ノ社會ハヨシ出生ノ減少ヲ見ル事アリトスルモ、之ニ比シテハ其度甚ダ少ナリ。幸ニシテ出生率ノ小ナル此社會ガ同時ニ小ナル死亡率ヲ有スル場合ニハ從來一時出生率ノ大ナル他ノ社會ト其自然増加率ヲ一ニスルヲ得タリトスルモ、今後決シテ久シク其狀態ヲ持續スル事能ハズ。何トナレバ、死亡ノ減少ハ他ノ社會ニ大ニシテ此社會ニ極小ナリ、出生ノ減少ハ此社會ニ著シクシテ他ノ社會ニ微ナリ。其自然増加率ノ間ニハ益大ナル懸隔ヲ生ジ、終ニハ此社會ニ於ケル自然増加ハ停止セラレ却リテ人口ノ減少ヲ見ン。此ノ如ク、小ナル出生率ガ最モ都合ヨキ死亡率ト相伴ヘル場合ニ於テ既ニ然リ。然ラザル場合ニ於テハ其更ニ不利ナル地位ニ立タル事更メテ説クマデモ無シ。

一々ノ場合ニ就イテ出生率ノ大小ト死亡率ノ大小ノ結合ヲ考ヘ來ル時ハ、此逆行法則ノ影響ヲ更ニ明確ナラシムル事ヲ得可シ。(一)階級別ニ就イテ見ルニ、貧民ノ高キ出生率ハ常ニ高キ死亡率ト伴ヘルヲ見ル。上級ハ從來低キ出生率ノ作用ヲ補フニ低キ死亡率ヲ以テシタレドモ此補償ハ既ニ其限界ニ達セリ、益急速ニシテ底止スル所ヲ知ラザル出生率ノ減少ハ漸次上級其物ノ衰滅ヲ誘致ス

ル傾向ナカラズトセズ。下級人口ノ増加ノミハ少シク其速度ヲ減ズル事アルモ依然トシテ存續ス可キガ故ニ文化ノ發達福利ノ増進ハカクテ一方無意識ノ裡ニ上級ヲ殺戮スルト共ニ下級ヲシテ其無意識ノ征服者タラシメツアルヲ見ル。同様ノ關係ハマタ國際間ニモ認ムル事ヲ得可シ。所謂生死平行法則ノ説クガ如キ嚴密ナル平行ハ勿論存在スル事無ケレドモ、死亡率ノ小ナル國ハ出生率亦小ナル事多シ。從來文明諸國ガ其減少シタル出生率ヲ以テシテナホ、以前ト同一ナル、若クハ更ニ大ナル自然増加率ヲ維持シ得タルモノ、一ニ其死亡率減小ノ急速ナリシニ依ル。而モ、死亡率ノ減少既ニ殆ンド其極限ニ達シタリトセバ、出生率ノ減少ハ愈人口ノ減少ヲ誘致セズバ已マザラン。文化ノ低度ナル弱國ノ人口ノミ獨リ増殖シテ強キ文明國民ノ衰亡ニ趣カントスル大勢ハ既ニ識者ノ憂フル所ナリ。都市ト田舎トノ區別ニ就イテハ少シク趣ヲ異ニス。此場合ニ生死平行法則ハ全ク行ハレズ。出生率ノ一般ニ高キ田舎ハ同時ニ低キ死亡率ヲ有ス。都市ノ運命ハ最初ヨリ悲觀的ナルモノニシテ、其低キ出生率ガ高キ死亡率ヲ償フ能ハザリシ事實スラ既ニ往々ニシテ認メラレタリ。勿論死亡率ノ減少急速ニシテ近時稍其自然増加率ヲ加ヘタルモ、死亡率ノ減少ガ其極限ニ近キタル以上、自然増加ノ漸次消滅シ、次デ自然減少ノ度ヲ加フルコトハ必至ノ運命ナリ。カクテ都市人口ハ再ビ新ナル自滅ノ方向ニ向ヒ、タダ田舎ノ人口ノ補充ニヨリテ其存續ヲ見ル時來ラン。人口其物ヨリ見ル時ハ、コレ田舎ガ消滅シ行ク都市ヲ征服シ占領スルニ外ナラザルナリ。概觀シ來レバ、富者ト文明ノ強國ト文化及豪富ノ中心タル都市ト共ニ漸ク滅亡ノ運命ニ向ヒテ下級ト弱國ノ民ト田舎トノミ漸ク繁殖シテ征服者タラントス。カルガ故ハJacobyハ云ヘリ、自然ハ平等ヲ好ムニ似タリ、此大則ニ背イテ優レタルモノハ先ヅ自ラ滅ビント